

# あとがき

## ——映画文学人生論

### 所要時間(概算)

人生	: 八十年	七十八万時間
仕事	: 四十年	三十五万四時間
小説	: 十時間	一千時間
映画	: 二時間	二百時間
俳句	: 一秒	一分四十秒

失われた時間はかえってこない

毎日が日曜日のおかげで、ようやく百篇の文学作品を読了。そのうち映画化されたものはほとんどDVDで鑑賞した。

百篇のうち前半の五十篇は文学のふるさとへの里帰りのつもりで選んだ。夏目漱石は特別扱いにして十五篇、その他三十五人の名作ないし話題作の作者は一篇に限定した。それでも、若い頃、読もうと思いつながら未読のままの作品が多い。できれば二十歳までに読了したかったが、古稀をすぎたからになってしまった。

しかも、内容を理解できたような気がしない。作者が伝えたかったことと私の理解との間にズレがある。再読、三読、感想を書き直す必要があるが、とりあえず今はこれでよしとする。

後半五十篇のうち二十五篇は映画の構成要素（監督、俳優、脚本、映像、音楽）、残りは人生の諸相（災害、権力、無常、原罪、大河）を意識して選び、できれば原作を読むことにした。私より若い作家もふくめて五十人の五十篇。やはり文学のふるさとへのこころの旅のつもりだ。

なお、一篇の小説の読了、一本の映画の鑑賞、一句の俳句の鑑賞に要する時間を計算してみた。

小説	十時間	百篇	一千時間
映画	二時間	百本	二百時間
俳句	一秒	百句	一分四十秒



## あとがき

映画文学人生論

おおまかな推定である。『羅生門』のような短編と『大菩薩峠』のような長編の読了に要する時間とは百メートル走とマラソンほどの差がある。映画も『戦争と人間』三部作の鑑賞には約九時間半を要するし、俳句も一句の鑑賞にてこずって、やたらと長い時間をがかかることがある。

なんのためにこんな計算をしたかというと、貴重な時間をムダに費やしてしまったのではないかという気持ちも心の片隅にないこともないからだ。百篇合計の所要時間は小説が一千時間、映画が二百時間にのぼる。人生八十年の七十万八百時間に比べれば短いとはいえ、もっとも有益なことに時間を使うべきではなかったか。

失われた時間はかえってこない。が、どうせ一億総懺悔の二十年、エコノミックアニマルでつぶした二十年、そのあげくにバブル崩壊、金融腐蝕列島で失われた二十年、の人生である。読書や映画に少々の時間をさいてもムダとはいえないと居直ることにしよう。

何のために？と問われれば、困ってしまうが、しいていえば、記憶の空白を埋め、現実とのズレを調整するためか。

そんな空白やズレがすべてなくなるはずがないが、なるべく少なくするようにすれば、それでよいと思う。欲をいえば、きりがない。

山登りもはやこれまで霧の中